

「ホモソーシャル」へのノスタルジー  
——進学校男子校OBの語りからの分析——

一橋大学 徳安慧一

1. 目的

本報告の目的は、学歴段階の移行に伴う男子校から共学校への移行の過程をジェンダーの観点から捉えることで、男性間における「ホモソーシャル」の構造を検討することである。そこで本報告では、男性化された生活環境としての男子校を事例に、当該校のOBによる語りにおける男子高校から大学への移行、及びそれに伴う形で語られた男性のみの生活環境をめぐる回顧と男女が混合した生活環境をめぐる現状認識について比較しながら検討する。これにより、男子校OBが経験した移行の過程から、異性愛男性が「ホモソーシャル」な関係を希求するあり方の一端を明らかにすることを旨とする。

2. 方法

本報告では、進学校とされる男子校のOB（10～30代）を対象に行ったインタビュー調査から得た質的データ25名分をもとに分析を行う。彼らは既に男子校という「男女別学の世界」を卒業しており、浪人という過渡的な時期を経る場合もありつつ、大学・大学院や職場といった「男女共学の世界」へと身を置いている。本報告では、男子校在学中における男性のみの関係性が確保されていた「男女別学の世界」と、男子校卒業後における男女の混在が起こりうる「男女共学の世界」とを比較する語りを中心に分析を行う。

3. 結果

インフォーマントの語りからは、男子校という生活環境に依拠する形で学内外を隔てる境界線がOBの認識上に引かれていたことが見出された。この境界線は学内外を隔てると同時に「男女別学の世界」と「男女共学の世界」、すなわち男性のみの世界と女性のいる世界を分けるものとなる。この線引きにより、女性との関係は生活環境から男子校という実体的な空間を超えて認識の外に置かれ、学内の男性間との関係と切り離される。結果、男性間との関係は学外＝女性の影響をほとんど被ることがなく、安定的で強固なものとなる。こうした線引きは大学への進学による「男女共学の世界」への移行の過程において、男子校という生活環境による根拠づけを失い、依拠するものを失った境界線は相対的に曖昧なものとなる。これにより、女性は関係において切り離すことの出来る第三者ではなく、生活環境内の存在として認識されるようになる。その結果、男性間との関係は男子校におけるほど安定的で強固なものではなくなる。

4. 結論

男子高校から大学への移行の過程は、男子校というジェンダー化された生活環境が持っていたホモソーシャルな境界線の実体的根拠をOBたちから喪失させる。この喪失によってホモソーシャルな関係における第三者としての女性の位置づけが変わり、このことはOBたちにかつてのホモソーシャルへのノスタルジーを語らせる。以上のことからホモソーシャルな関係の希求には、当該関係外との境界線を必要とする認識が働いていると考えられる。

参考文献

Sedgwick, Eve K., 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press. (=2001, 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会.)